設楽発掘通信

No.51
令和元年
12月号

石原遺跡と万瀬遺跡の地元説明会を開催しました。

去る十月二六日（土）に石原遺跡、十一月九日（土）に万瀬遺跡で地元説明会を開催し、石原遺跡で四十一名、万瀬遺跡では三十五名の方が参加しました。今年度の地元説明会は八月の上ヲロウ・下ヲロウ遺跡に引き続き計三回となりました。

今年度の設楽ダム関連の遺跡発掘調査では上ヲロウ・下ヲロウ遺跡で縄文時代集落と近世集落が確認されました。また、石原遺跡では縄文時代晩期から弥生時代の遺物包含層と縄文時代晩期の配石墓などの遺構が確認されました。万瀬遺跡では近世の集落が確認され、主に戦国時代から近世の遺物が出土しました。

現在、無事に三遺跡の調査を終了できる予定です。調査に際しましては皆様のご協力とご理解をいただき、ありがとうございました。今後ともよろしくお願いいたします。

（愛知県埋蔵文化財センター　酒井　俊彦）

写真３　万瀬遺跡地元説明会の様子

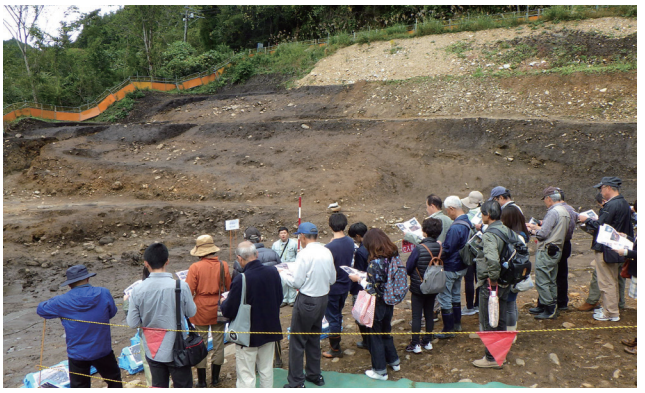

写真１　石原遺跡地元説明会の様子

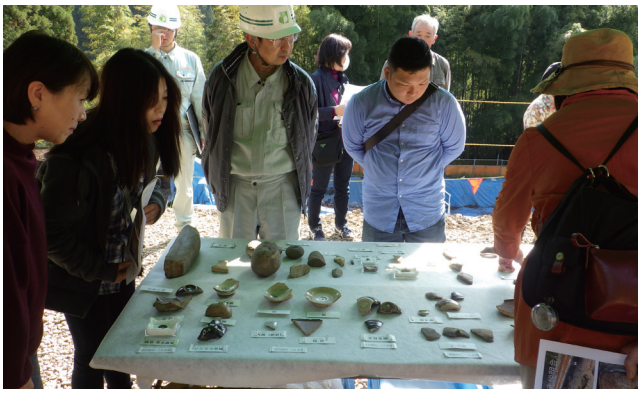

写真４　万瀬遺跡遺物見学の様子

写真２　石原遺跡遺物見学の様子

万瀬遺跡

万瀬遺跡ではBa区に続いてC区、Aa区での調査が終わり、空撮を行いました（写真5、9）。現在はBb区やAb区での調査を進めています。また、十一月九日に開催した地元説明会では、三五名の方々に来て頂きました。

先日の地元説明会の会場にもなったC区では、少なくとも六棟の掘立柱建物跡が見つかり、また、その内一棟が大規模であることが主な成果となっています。C区西側の上段部で見つかった二棟の建物跡は、規模が二・五mから五・三mで、住居などの用途が想定されます。東側の下段部では少なくとも四棟の建物跡が見つかっていますが、北東端部にはより多くの建物が立っていた可能性も考えられます。規模は一つを除いて上段のものと大きく変わりません。また、建物が重なっている様子も確認され、調査の結果から、そこでは建て替えをした際に建物を拡張していたことも明らかになりました。C区で最大の建物跡は、上段と下段の間の落ち込みに沿うように建つ細長いもので、長辺は約一一・五m、短辺は約三mのものです。この建物に合わせて山の斜面を削っており、建物本体の大きさに加え、周辺の整備の面でもかなりの労働力が投入されたことが推測されます。

C区からの出土遺物は縄文時代の早期（約一万一千年前から九千年前）から戦国時代など中世のもの、近世にあたる江戸時代のものまで存在しますが、建物群の年代は江戸時代後半の一八世紀ごろと推測されます。

また、地元説明会後の調査で、C区には縄文時代早期の竪穴建物跡が三基あることが判明しました。出土する遺物は石器（剥片）が多く、また縄文時代早期の押型文土器片も出土しています。

Aa区ではBa区やC区のような掘立柱建物の跡はほとんど見つかっていませんが、江戸時代のお金である寛永通宝一二枚が出土する遺構が検出されました。そこでは煙管二本も出土しており、どちらも当時の副葬品として一般的なものであることから、お墓であると考えられます。出土したお金は三途の川の渡し賃とされる六文銭と考えられ、これが二セット分の一二枚あり、煙管も二本であることから、一つの墓坑に二人が埋葬されていたと推定できます。Aa区ではほかに、縄文時代のものと思われる竪穴建物跡一基も見つかっています。

Bb区は現在調査中ですが、今までの調査で井戸の跡が発見されました。付近には現在も水が湧いている谷状の地形があり、その谷の中で井戸と思われる遺構が集中しています。これらの井戸跡は出土した遺物から江戸時代後期のものと推測され、当時の土地利用の様子がわかる一例となっています。

（愛知県埋蔵文化財センター　河嶋優輝）

写真5　C区全景（赤線部が建物跡）（南から）

写真6　C区の大型掘立柱建物跡
（人の立っているところがおよその柱位置）

写真7　Aa区の墓坑の副葬品出土状況

写真8　Bb区の井戸跡

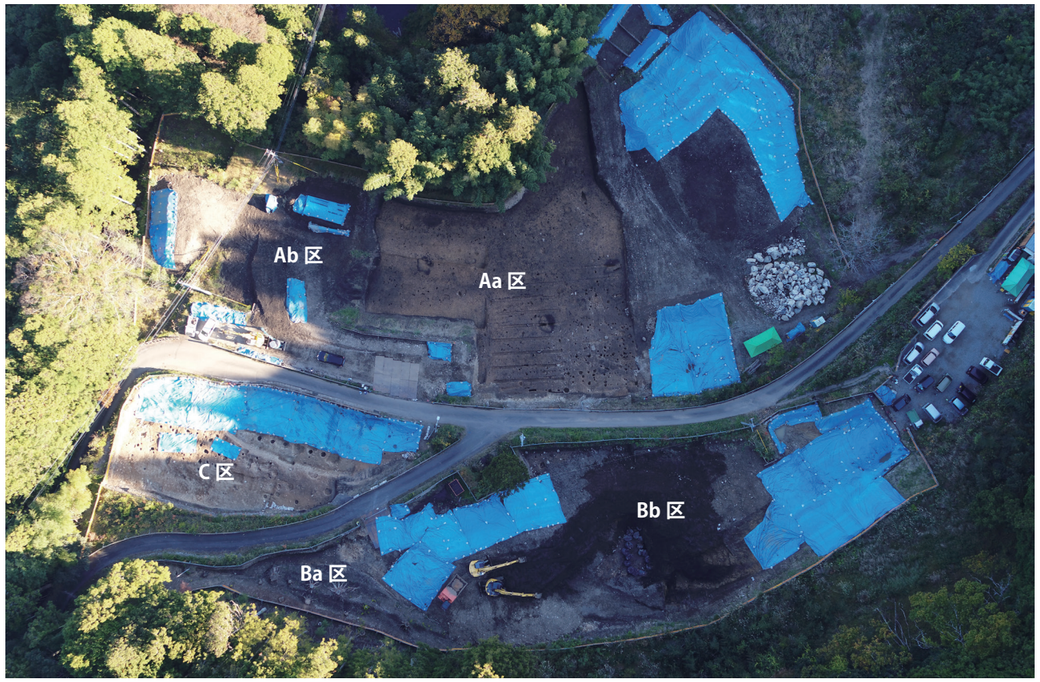

写真9　万瀬遺跡全景（西から）

万瀬遺跡の出土遺物

地元説明会で展示した遺物を中心に、万瀬遺跡の出土遺物の一部をご紹介します。

写真13　Ba区出土の打製石斧（縄文時代）

写真14　C区出土の腰折皿（戦国時代）

写真15　Aa区出土の端反碗（江戸時代）

写真10　C区出土の撚糸文土器（縄文時代早期）

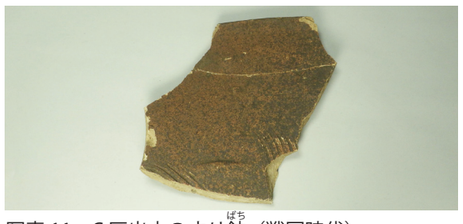

写真11　C区出土のすり鉢（戦国時代）

写真12　C区出土の鎧茶碗（江戸時代）

石原遺跡

石原遺跡では、十月二六日に一九C区で地元説明会を開催しました。その後、十一月からは一九B区の調査を行いました。

一九B区は、一九A区と同様、土石流が調査区のいたるところで確認されました（写真16）。調査区東側の黒色土混じりの土石流からは、縄文土器片や剥片などが出土しました。川側は砂が堆積しており、長い間地表となっていた場所も確認され、そこから縄文土器片や黒曜石製の剥片などの遺物が出土しました。特に黒曜石が十点ほどまとまって出土しています。しかし、土器や石器が摩滅していることから、上位の山の土に含まれていたものが流れてきたと考えられます。

写真 16　19B 区全景（南から）

一九C区は前号までご紹介した通り、川側の谷地形（〇一五NR）から、縄文時代後期後葉から弥生時代前期にかけての土器や石器が大量に出土しています（写真17）。特に、土器は各時期とも継続的に出土しています。このことは、縄文時代から弥生時代への大きな時代の変換点の中で、設楽地域がどうだったのかを知る上で重要な事例となるでしょう。

石原遺跡の調査は完了し、現在、図面の整理や出土遺物の洗浄作業を行なっています。そこで得られた成果や石原遺跡の総括は、次号でお伝えします。

（愛知県埋蔵文化財センター　田中良）

写真 17　19C 区全景（北東から）

設楽発掘通信
No.51
令和元年12月号
編集・発行　公益財団法人 愛知県教育・スポーツ振興財団
愛知県埋蔵文化財センター
〒498-0017 愛知県弥富市前ヶ須町野方802の24
電話 （0567）67-4161【管理課】4163【調査課】
ホームページ http://www.maibun.com
Facebook https://www.facebook.com/maibunaichi
Twitter https://twitter.com/aichi_maibun
印刷・協力　株式会社イビソク